日本バプテスト連盟

性差別問題特別委員会

ニュースレター 第39号　2024．3．15

★日本バプテスト連盟のホームページでも読むことができます。

巻頭言：そこにある、いのち

今井朋恵

いつも新しい練り粉のままでいられるように、古いパン種をきれいに取り除きなさい。
（コリント信徒への手紙一５章７節　新共同訳聖書）

街で反対色を大胆に用いた服を見掛けます。難しい取り合わせ、絶妙なバランスによる魅力があります。油絵で何色と言えない色が良いと聞いてきました。個々を生かしながらの調和は簡単とは言えませんが、新たな可能性です。

憲法13条は、個人の尊重と幸福に生きる権利の規定、プライバシー権、肖像権、名誉権、自己決定権などです。14 条は、人種や宗教、性別、社会的地位等に関係なく、差別されない平等権の規定です。基本的人権は、人が生まれながらに持つ権利ですが、人権の遵守は自明ではありません。総論に賛成、各論に反対？教会からも聞こえてきそうです。差別や偏見は良くないと言いながら、関係が自分に及べば話は別となるのです。性的少数者は、家族の無理解に苦しむことも多いです。「男らしくあれ・女のくせに・性的少数者は認めるが受け入れない」は、枠に囚われ、そこにある、いのちを忘却しています。全ての人は人権を持ち、神に愛される存在なのです。

今治教会は、教会組織当時より「女・子どもの教会」弱い教会と称され、2000 年会堂建築では今治に建てられるはずは無いと笑う方もありました。数年前、ある政治家が「性的少数者には生産性がない」と発言し問題とされました。結婚し子を産むことが生産的というのでしょう。人は国のロボットではありません。国や教会もお金や生産性が第一のことでしょうか。

先日、ホロコースト・第２次世界大戦・ベトナム戦争に携わった兵士たちの異変を視ました。武器を持たない人や幼子も殺戮、加害側の心身にも影響し PTSD を発症、自責の念から自死する人も…。戦争は人間性の破壊を強いるのです。自然や生き物にも悪をもたらし、癒えることの無い痛み苦しみ、死と絶望です。同じように、差別も誰の益にもなりません。

召しを受けた多くの女性たちが理不尽な差別を受け、牧師を続けられなくなりました。被害者は居るが加害者は居ない？よく言われることです。体質改善は容易ではありません。いのちと思わず、抑圧し決定権を奪うことは暴力です。私たちは、価値観が異なる様々な人を排除し、何を守ってきたのでしょう。謝ることは負けることではありません。間違いを認め、新たな生き方へ向かうのです。人権感覚を養い、いのちの輝きを真に喜び合える教会、連盟を祈ります。

（いまい　ともえ／性差別問題特別委員会委員　今治バプテスト教会）

「どなたでもどうぞ」と言うのであれば・・・

匿名

「男子は青色で、女子は赤色」。わたしがこども時代は、そのように色分けされていることに違和感を覚えることすらありませんでした。その頃と比べると、考えられないほどに、ジェンダーによる違いが意識されなくなったように思います。

幼稚園で働いていると、“女の子”になりたい“男の子”や、“女の子らしい格好”をしたくない“女の子”に出会います。好みの色が、“女の子らしく”なかったり、“男の子らしく”なかったりするくらいは、「好みの色は性別関係ないよね」と受け容れられても、姿格好や、そもそもの性認識自体となると、「すぐには受け容れづらい・・・」と感じてしまうことがあります。でも、こどもたち同士のやり取りを見ていると、そんなことを気にし合っている様子はほとんど見られません。また、日々こどもたちと接している先生たちもそうです。

多様性社会だと言われるようになって久しいですが、こどもたちは確実に互いの違いを受け容れ合って生きようとしています。幼稚園のこどもたちだけではありません。小中高生になったわが子たちと話していても、互いの違いを殊更気にせずに、さまざまな友だちと付き合っていることがわかります。

おとなは、どうでしょうか？教会は、どうでしょうか？おとなの中でも、教会は多様性に対して・・・特に性における多様性に対しては、ずいぶんと社会からも“置いてけぼり”になっているように感じます。「若い人たちが教会に来ない」と嘆いていますが、そんな“感覚”の違いも、若い人たちが教会に足が向かない原因のひとつなのかもしれません。

町のコンビニやスーパーに行くと、本当にいろんな人たちが買い物をしています。中には“面倒な人”もいます。それでも、お店はよほどのことがなければ、その人たちのことも受け容れており、「『どなたでもどうぞ』というのは、こういうことなのか・・・」と感心させられます。

「どなたでもどうぞ」と言っている教会は、本当に「地域に開かれている教会」となれているでしょうか。もっといろんな出会いに開かれ、もっと学んでいければと願います。

ある出来事をきっかけに

匿名

この記事は、教会でのある出来事をきっかけに書くことになりました。私たちの教会では、長年の間、聖歌隊讃美が礼拝で歌われてきました。聖歌隊讃美と言ってもさまざまなバリエーションがあります。バンド形式やデュエット形式の讃美、そして「女声（じょせい）聖歌隊」と「男声（だんせい）聖歌隊」による讃美も含まれます。ある日曜日、「女声聖歌隊」が讃美した後、その名称について、ある方から質問が寄せられたのです。「『女声』ってどういう意味なのですか？」と。詳しくお聞きすると、「女の声・男の声」という呼び方に違和感を

覚えておられることが分かりました。その方は、ご自身のジェンダーアイデンティティとセクシュアリティを探し求めている中で、「女はこうならなくてはいけない」「男はこうあるべきだ」という考えに抵抗を感じておられることを語ってくださいました。

その後、教会では、このことを語ってくださった方に寄り添えるような対応を出来ていません。教会としてセクシュアルマイノリティへの理解を深めていく必要を強く思わされています。

けれども・・・思えば、私は、セクシュアリティやジェンダーについてかなり保守的な見解を持っていました。小学生・中学生の時には、誰かをからかうために、同性愛者呼ばわりしていたことも事実です。自分自身を反省しなければならず、謝らなくてはいけないことが沢山あることに気づきます。なぜそのような私が性の多様性が守られるものだと気づかされたかというと、国外に留学する機会が与えられたからです。そこで、セクシュアリティやジェンダーの多様性のあり方を見せられました。一人ひとりが、各々の持つ性指向やジェンダーアイデンティティを尊重されるかけがえのない存在であることに気づかされました。このような経験によって私自身が変えられてきましたので、「わたしたち教会は多様な人々と出会い、一緒に悩むことができますように」という祈りを深めるのです。名称や伝統を重んじる以上に、出会わされる人を大切にする教会でありたいと思います。次回記事を書く機会があれば、神さまが見せてくださる新たな展開について書ければと、期待を込めて願っています。

神学校へのアンケートを通して

今給黎眞弓

委員会は、2004 年の総会で委員会設置が可決され、活動が始まり 20 年になろうとしています。性差別はすべての人のいのちに関わる重大な課題であると受け止め、性差別の無い教会を目指して、学びと発信を続けてきました。何が差別であるかを知り解放を目指して声を上げていくこと、自らの差別性に気づかされながら、自身が変わることの難しさにもがきつつ、それでも変わっていきたいと格闘しています。

そのような中で、教会の中の深刻な性差別をなくすために神学教育の大切さが話題に上がってきました。牧師や教会の奉仕者たちがどのような学びをし、聖書をどう読むか、どのような共同体作りを目指すか等は教会にとって大きな課題です。そのような意味で、学びの場を提供する「神学校」の役割は大きいと考えました。そこで、現状を知りたいと、昨年夏、九州バプテスト神学校、西南学院大学神学部、東京バプテスト神学校に宛てて性差別やハラスメントに関するアンケートをお願いしました。

内容としては、①開講科目としてフェミニスト神学があるか、どのような位置づけか②教師、理事等には多様な人がいるか③学びの場に性的少数者がいることを意識しているか④どのような具体的な対応をしているか⑤神学校を運営する理事や教師は性差別やハラスメントの学びをしているか⑥学びの場でハラスメントが起こった場合、表に出しやすい雰囲気か⑦差別発言やハラスメントが起こった時にどのような対応をしているかというものでした。そ

れぞれの神学校が誠実にこれらに応答して下さいました。「フェミニスト神学」という科目は無いにしても、聖書を読む視点を変える取り組み、積極的に性と人権の科目やプログラムの開講、多様な教師たちの存在等、意識して取り組みがなされていることを伺いました。神学校という場には多様な人々が集い、その違いが気づきと変革をもたらすと思います。運営にあたる理事や職員、教師や学生（受講生）たち、それぞれから多くを受けることができ、互いが刺激し合い、学び合い、成長するダイナミックさがあると思いました。

性にまつわる事は、人がどのように生きるかの根幹をなすもので、そこが軽んじられたり傷つけられたりするとその傷はなかなか癒えるものではなく、時としていのちを奪っていくことにもなります。そして誰も「他人事にはできない課題」であると思います。これまで培われてきた価値観や当たり前を問い直し、大切な課題として学び続ける必要性を感じました。

委員会からのアンケートにお答えくださったそれぞれの神学校に感謝し、更に豊かな場となっていかれるようにお働きのためにお祈りいたします。委員会も更に学びを深め、諸教会に資する発信をしていきたいと願っています。

多様性を尊重し、対等な場で神学することは、神学校に限らず教会においても広がりをみせます。ひとりひとりが神学する（「私は聖書をこう読む」「私は神をこう信じる」と語りあい、生きる）豊かさを体験しつつ、いのちの道を選び取っていきたいと思います。

（いまぎれ　まゆみ／性差別問題特別委員会委員　豊中バプテスト教会）

編集後記：

今号のニュースレターには、お二人の方が匿名で綴ってくださった思いが掲載されている。そこには、教会がセクシュアルマイノリティとの出会いから学びつつ、一人ひとりの違いを認めて互いを大切にしあう存在になっていくことへの切なる願いが寄せられている。アメリカ合衆国のトランプ大統領により、「多様性・公平性・包摂性」（DEI）といった人種やLGBTQ＋などの性別・セクシュアリティの多様性を推進する政策の撤廃に関する大統領令に署名がなされた。それに追従するように、DEI 推進プログラムの見直しを実地するアメリカの大企業も出てきている。一方、このようなトランプ政権の方針に抗するデモ行進が行われ、ニューヨークマンハッタンに集結した１万人を超える人々によって反対の声があげられた。

「基本的人権は、人が生まれながらに持つ権利ですが、人権の遵守は自明ではありません（1 面）」。移り変わる時代のなか、その時々にあらわれる社会の権力や思想や認識や価値観に対して教会は、いのちを、神が一人ひとりにくださった何ものによっても傷つけられてはならない尊厳あるものとして見据え、その道を生きるための声をあげ続けていきたい。

（よしだ　なおし／性差別問題特別委員会委員 室蘭バプテスト・キリスト教会）